

原発性免疫不全症を疑う10の徴候

01 乳児で呼吸器・消化器感染症を繰り返し、体重増加不良や発育不良がみられる。

02 1年に2回以上肺炎にかかる。

03 気管支拡張症を発症する。

04 2回以上、結核炎、骨髄炎、肺嚢腫炎、敗血症や、皮下膿瘍、臓器内膿瘍などの深部感染症にかかる。

05 抗生薬を服用しても2か月以上感染症が治癒しない。

06 重症副鼻腔炎を繰り返す。

07 1年に4回以上、中耳炎にかかる。

08 1歳以降に、持続性の顎口瘡、皮膚真菌症、重症・広範な疣贅(いぼ)がみられる。

09 BCGによる重症副反応(骨髄炎など)、単純ヘルペスウイルスによる脳炎、髄膜炎による髄膜炎、EBウイルスによる重症血球凝集症候群に罹患したことがある。

10 家族が乳幼児期に感染症で死亡するなど、原発性免疫不全症候群を疑う家族歴がある。



引用：厚生労働省原発性免疫不全症候群調査研究班（2010年改訂）
(Jeffrey Modell Foundation: 10 Warning Signs of Primary Immunodeficiencyより改変)

生まれつき、敵と戦うからだの免疫系異常

自分を守り、敵と戦うからだのシステムが生まれつき、うまく働いていない10のサイン



先生のご紹介

大坪修介
大坪子どもクリニック 院長

PROFILE

熊本大学卒。卒業後鹿児島大学小児科入局。小児科・小児神経専門医。医学博士。鹿児島大学医学部臨床教授。一人ひとりを大切に、誠意をもった診療を心がけています。

自分の子どもが他のお子さんと比べて繰り返し熱をだす。毎回熱が長引く、薬が効きにくい。風邪や下痢が長引いて体重も増えない、また入院と言われたなど、うちの子は生まれつきからだが病弱じゃないかと感じたことはありませんか？ 病気をくり返すことは子どもにも家族にも大きな負担です。もともと身体を守る仕組みのことを「免疫」といいます。

この免疫をつかさどる分子の生まれつきの異常によって、免疫系が正常に機能しなくなる疾患を原発性免疫不全症候群（生まれつきの免疫系の異常）といいます。330以上の疾患が知られていて、同じく300以上の責任遺伝子が原因として確認されています。千人に一人程度の頻度と推定され、決して珍しい病気ではありません。

私たちが日常遭遇する典型的な症状としては易感染性があります。これは感染症を反復したり、感染症が重症化したり、弱毒菌に感染したり、なかなか抗生薬が切れなかったりするようなことを指しています。現在「原発性免疫不

全症を疑う10の徴候」が作成され、Webなどで掲示されています。これらの疾患の中には乳児で感染症や下痢を繰り返し、体重増加不良を呈する場合など、緊急に検査を進める必要がある疾患も含まれていますので、10のうち一つでも当てはまるものがあればかかりつけの医師に相談してみてください。

原発性免疫不全症は、易感染性のみならず、自己免疫疾患、炎症性腸疾患、悪性腫瘍、自己炎症性疾患などの発症に関与し、またアレルギーにも関係していると言われています。



<https://www.otsubo.org>

大坪子どもクリニック

時	朝	昼	夕	〒890-0034
月	○	○	○	鹿児島市田上2-15-11
火	○	健・予	○	TEL.099-286-6121
水	○	健・予	○	FAX.099-286-6127
木	○	×	○	※日曜・祝日休診
金	○	健・予	○	
土	○	健・予	×	